

みらいへど

JA全農えひめ情報

■特集〈愛媛県TACトップセミナー講演録〉

TACを中心とした生産から販売まで一体となった産地育成～JAうま～

3

2015・March





▲「宮内伊予柑」の母樹

▲(写真上・左下) JAえひめ中央が、2月11日、直売所「太陽市(おひさまいち)」前で、「宮内いよかん還暦菜」を開催。伊予柑タワーの設置、「合格祈願いよかん」の配布、伊予柑の詰め放題やクイズ、生搾りジュースの試飲など多彩な催しを行いました。



「宮内伊予柑」 生誕60周年

(松山市)



全国生産量約9割を占める愛媛県の年明けの主力品種「宮内伊予柑」が誕生して60周年を迎えました。

「宮内伊予柑」は、昭和30年6月に松山市平田地区で故宮内義正さんが発見した普通伊予柑の枝変わり品種で、従来品種より早生で果実が大きいのが特徴。昭和41年に「宮内伊予柑」として種苗名称登録されました。種苗登録後、宮内さんは苗木の利用を生産者に開放したことで、地域は一大産地となりました。温州みかんが昭和43年・47年と生産過剰により2度の大暴落を経て、伊予柑などの中晩柑類等新品種への転換が図られる中、作りやすく、色・味・香りが良くて200円以上の高単価で販売された「宮内伊予柑」は、柑橘農家の経営安定に大きく寄与し救世主的な役割を果たしました。

近年では消費嗜好の変化や新品种への転換、高齢化等によって、県内の伊予柑生産量は、平成4年の17万5,500tをピークに減少傾向(平成24年産3万9,011t)ですが、「宮内伊予柑」は「還暦」を過ぎても高い知名度と生産量を誇る愛媛産柑橘の顔として活躍が期待されています。

めぐり〜ど

March 2015

CONTENTS

全農グループの経営理念

私たち全農グループは、
生産者と消費者を安心して結ぶ
懸け橋になります。

私たちは「安心」を3つの視点で考えます。

- 営農と生活を支援し、元気な産地づくりに取り組みます。
- 安全で新鮮な国産農畜産物を消費者にお届けします。
- 地球の環境保全に積極的に取り組みます。

今月の表紙



ツクシ、菜の花、タンポポ、スマイレ…
花咲く季節になりました。子どもたちは
アオムシに興味しんしん。おいしいキャ
ベツに目がないモンシロチョウは忙しそ
うに飛びまわり、まるまるキャベツを一つ
一つ刈るお父さんお母さんたちもまた、
忙しさに追われています。

あたたかな陽射しとゆたかな恵みの春
が始動しています。

●表紙：キャベツ畑
はら ふみ(イラストレーター)

※『めぐり〜ど』は、「愛媛農業 (Agriculture)」を「リード (Lead)
する」という意味と「心をつなげる (Agreed)」という意味を
込めています。

農の風景Vol.171

「宮内伊予柑」生誕60周年 (松山市)

2

〈特集〉「平成26年度TACトップセミナー」先進地事例報告より
～JAうまにおける営農振興について～
TAC (アグリアドバイザー) を中心とした
生産から販売まで一体となった産地育成

うま農業協同組合 代表理事常務 加藤 正雄さん
うま農業協同組合 営農指導課長 合田 仁さん

8

THE・ねっとわーく

9

統計BOX

10

ふるさと ESSAY VOL.239
～おしゃれなフルーツカッティング～
ジュエルフルーツ
松岡 恭子さん

12

TOPIC NEWS

16

READERS通信
NOW NOW COOKING
〈今月の素材〉イチゴ

JA全農えひめ

ホームページ
<http://www.eh.zennoh.or.jp>

■JA全農えひめ「えひめの食」企画
<http://www.eh.zennoh.or.jp/ehimenosyoku/>
※「えひめの食」では、旬の農産物情報を発信しています。

◆(株)えひめ飲料
<http://www.ehime-inryo.co.jp>

◆JAえひめアイパックス(株)
<http://www.iyokkora.jp/>

◆JAえひめ物流(株)
<http://www.jat-ehime.co.jp/>

◆JAえひめフレッシュフーズ(株)
<http://fresh-ranran.jp/>

◆(株)ひめライス
<http://www.himerice.jp/>

◆JAえひめエネルギー(株)
<http://www.ja-ehimeene.co.jp>

■「平成26年度TACトップセミナー」先進地事例報告より

「JAうまにおける営農振興について」

TAC（アグリアドバイザー）を中心とした生産から販売まで一体となった産地育成

うま農業協同組合 代表理事常務

加藤 正雄さん

うま農業協同組合 営農経済部営農指導課長

合田 仁さん

「農家との架け橋！出向く営農」をスローガンに！

JAうまは、四国中央市の全域と新居浜市の別子山を管内とするJAです。四国中央市は、紙の出荷額は4,800億円と全国第一位で、全国屈指の製紙・紙加工業の工業地帯ですが、平成16年4月に2市・1町・1村が合併した当初の人口9万8千人が、現在では9万1,200人に減少してきています。

JAうまは、平成8年4月に8JAが合併して誕生し、その後JA川之江市が平成15年4月に合併して現在の形になっています。

組合員数は、正組合員が5,180人、准組合員が8,282人という状況です。主な農作物は、水稲、特産の里芋・山の芋のほか、鶏卵、肉豚があり、販売品販売高は20億1千万円で、そのうち約8億円を占める畜産については販売価格が持ち直しているものの飼料高騰等により農家も減少傾向となっており対策に苦慮している状況です。

JAうまでは、県内で最も早く平成20年4月に「農家との架け橋！出向く営農」をスローガンに、TACの取り組みを始めました。TACといっても、私どもでは「アグリアドバイザー」という名称を付けて呼んでいます。まず、私どもがTAC、アグリアドバイザー



JAうま 加藤 正雄 代表理事常務

ザーを導入したきっかけをお話ししたいと思います。

まず1点目は、どのJAでも同じようなことが言われますが、広域合併によってJAが大型化し、組合員のJA利用が低下してきたこと。第2に指導員が農家に向いて指導する回数や時間が減少していたこと、第3に管内の主要品目である里芋において、従来の栽培方法では労力がかかるため規模拡大が難しい状況となっていたことなどがあります。

担い手に向く専任担当者として アグリアドバイザーを導入

特に、JAと農家との接点ということに関しては、私ごとですが、平成18年3月に役職定年となり58歳でJAを退職し、それから間もなく役員改選で非常勤理事となり、翌年の役員改選で営農担当の常務理事に就任しました。平成15年からJAに勤務する傍ら農業に携わり、またJAを退職してJAの営農指導を見て感じたことは、JAは第4次営農振興計画で「出向く営農」を掲げていたものの、その取り組みが十分ではないということでした。

平成18年当時は、管内15支店に経済担当の窓口があり、主要な支店には営農指導員を配置していましたが、指導員は販売・購買業務等との兼務になっていたため、栽培講習会などは実施していましたが、農家に向く回数

や時間などが十分とることができず受け身の状況・体制となっていたため、農家との接点を強化する必要性を強く感じました。

また、管内の基幹品目である里芋については、農家の高齢化も進んで栽培農家も減る中で、従来の栽培方法では労力がかかるため規模拡大が難しい状況にあり、農家所得を上げていく、産地を維持していくためには、機械化・省力化による規模拡大を進めていく必要がありました。

こうした課題に対応するため、当時の組合長に「私の思うようにやらせてほしい」と進言して、平成20年4月に、営農指導員を経済センターに集約し、担い手に向く専任担当者として、アグリアドバイザーを配置することになりました。

当時は、里芋の優良品種でJA全農えひめが商標登録した新ブランド「伊予美人」への切り換えを進めていた時期でもあり、アグリアドバイザーを中心として品種更新と機械化等による栽培の簡素化・省力化を強力に推進しました。

また、JAの直売所「ジャジャうま市」が平成20年にオープンしたことや、営農経済事業の改革として購買品の供給店舗13店舗を経済センターとして5拠点に集約する構想もあり、そういった背景もあってTAC、専任のアグリアドバイザーを配置したわけです。なお、経済センターの集約は平成21年度に実施しました。

アグリアドバイザーの導入にあたっては、どのように取り組んでいくかということで、JA全農えひめにも相談して、ちょうど全国で担い手対応のTACシステムができあがったということでしたので、そのシステムを利用させていただきました。

管内500戸の担い手を訪問 出向く営農を実践！

アグリアドバイザーは、営農経済担当常務の直轄として、「農家との架け橋！出向く営農」をスローガンに設置しました。

当時の体制は、管理者が営農指導課の課長、指導員6名。指導員のうち1名は管内全体の畜産を担当し、5人が地区担当ということで分担して管内を巡回することとしました。

巡回する担い手は、認定農業者、水田1ha以上の耕作者、産直市の会員、各地区の生産部会代表者・関係者約500戸を対象とし、管内を5地区に分けて一部重複するところもあります。地区担当1人が約100戸を担当する形でスタートしました。

地区担当者には、軽四自動車や携帯電話をそれぞれ与え、JAの広報誌では地区担当の名前や携帯電話等を掲載して周知PRしました。

体制とアグリアドバイザーの規約を作り、どういったことをしていくかという形はできたのですが、担当者はどのようにして出向い



ていけばよいのか、それぞれ悩みや不安もあったようです。私も毎月1回の定例会に出席して報告・相談を受ける中で、農家からは「今さら来られても」「毎日来られても我々には必要ない」といった声もあったと聞いており、「農家との架け橋！出向く営農」と口で言うのは簡単ですが、現実には農家の受け入れも厳しい状況でした。スタート当初の半年ほどは、苦労もあったと思いますが、1年かかって何とか出向く営農の体制ができたように思います。

担当者は、担い手を訪問するのに手ぶらでは行きにくいということで、訪問時の資料としてJA全農えひめから提供してもらった「グリーンレポート」や担当者が資材や販売等の情報資料を作成して出向くなどいろいろな工夫もして出向く営農を実践してきています。

JA販売実績は拡大！ 行政と連携して相談対応強化

TACの活動は、訪問によって担い手の苦情や要望の聞き取り、そして聞き取った苦情や要望については迅速に対応・連絡・回答す

ることが重要です。私もできることは即対応するように強く指示してきました。

幸いなことに、私どもの地域では平成19年4月に、農業版ワンストップサービスをやっていこうと四国中央市農業振興センターが設置され、構成する市の農業振興課と農業委員会、県の農業指導班がJAうまの経済センタ―に入っていただいて「ワンフロア化」が実現しております。JAと行政組織との横の連携によって担い手に応じた作物・営農相談に取り組んでおりますが、総合的な情報提供や各種の相談対応をさらに強化したいと考えています。

担い手への訪問活動は規模の大きな約500戸に限定しておりますから、年2回の地区別の座談会を開催する中では、「自分たちの所には全然来てくれない。訪問してほしい」といった声も多く出されてきております。私も役員からは、「こうした取り組みは全戸対応ができないこと、必要な場合は携帯電話や5つの経済センターの職員に連絡していただきたい」ということで理解を求めているところ です。

まず、認定農業者など訪問している500戸については、農家所得の向上、取扱高の増加につながるよう結果を出そうということで取り組んできています。

これまでの取り組み経過については、のちほど合田課長の方から具体的な説明をいたしますが、アグリアドバイザーを核として特産

品の里芋「伊予美人」を中心に生産から販売まで一体となった取り組みを進めた結果、高齢化等により生産農家は減少傾向にあります。が、機械化や省力化等の取り組みによる担い手の規模拡大も進んでおり、生産量も何とか減少を食い止めているという状況です。

JAうまの販売品販売高は平成18年・19年当時は14～15億円程だったのですが、直売所等の設置・拡大もあり、先ほど述べたように現在では20億円余りに拡大している状況です。

なお、四国中央市農業振興センターは、JAの経済センタ―に入っておりますが、26年12月下旬に農業振興課、農業委員会、それ従来は土居地区の庁舎にあった農林土木課も含めて四国中央市の農林関係の全部署が入る施設が完成しました。県の農業指導班は従来通り経済センタ―に駐在しており、引き続き同一敷地内で連携し、一体となって担い手・農家対応と地域特性を活かした農業振興に努めたいと考えています。

里芋産地の維持・拡大を！ 営農経済事業改革に取り組む

次に、JAうまの営農経済事業の取り組みについて触れておきたいと思っています。

JAの改革が叫ばれていますが、JAうまでも金融店舗の再編と営農経済事業の改革を進めようとしています。平成27年6月の総代

会に提案できるよう審議・検討を進めているところで、今後3年ほどかけて実践していく考えです。

営農経済事業では、管内の主要作物である特産の里芋・山の芋の産地をどう維持・拡大していくが大きなテーマです。

現在、里芋の選果場は管内2か所に分散しており、選果機も老朽化しています。組合員から「施設を一つにして産地として品質の均一化に向けて取り組んでほしい」という要望もあり、営農経済事業改革の中で選果場の建設を計画したいと考えています。ただ、最新の選果機と施設の建設については、かなりの投資が必要です。現在はJAうま単独での建設を検討していますが、県内では東予地区に里芋「伊予美人」の産地があり面積も拡大しており、他の産地も面積拡大によって選果機の更新等投資も必要になってきます。私としては、愛媛の「伊予美人」ということで産地間で連携した取り組みができないか、JA全農えひめとしてもJA単位にとらわれるのではなく、物流も含めて広域での施設利用の検討を進めていただきたいと思っています。

また、金融店舗の再編とあわせて、経済センターは現在の5センターを3センターへ集約化を検討しています。その場合、指導体制も3センターにして専任体制を敷いて取り組みめないか検討を進めているところです。

TAC、アグリアドバイザーの取り組み経

過と今後のJAうまの営農振興についてお話ししましたが、地域農業とともに歩み総合事業を展開しているJAとして、TAC、アグリアドバイザーが対応する比較的規模の大きな担い手だけでなく、20aから30a規模の農家の対応も忘れてはならないと思っています。JAの経営基盤の7割はそういった方々に支えられており、TACとは別の形で対応していかなければならないと考えています。振り向いたら誰もいなくなっていたというJAにしてはなりませんので、大事にしていかなければならないと思っています。

TAC活動における里芋「伊予美人」の振興と今後のTAC活動については、合田課長にバトナタッチします。

集荷率向上をめざし 農家所得の確保に取り組む

JAうまの合田です。

JAうまでは、古くから里芋が栽培されてきました。文献では江戸時代からというものもあり400年前から始まり、伝統に裏付けされた高い技術水準があり、昔ながらの栽培体系で栽培されてきました。産地として残ってきた要因は、日本三大局地風「やまじ風」対策で導入されてきたこと、水稲より収益性が高いこと、水田栽培で輪作体系により安定した品質・収量が得られてきたこと、そして品質・味・貯蔵性にこだわった品種が開発さ



JAうま営農指導課 合田 仁 課長

れてきたことです。

里芋のJA荷受け数量は、平成15年以降、販売金額は伸びたものの取扱数量が激減しました。この理由を分析すると、JA以外の商系業者に比べて農家手取り価格が安いということが主要因でした。

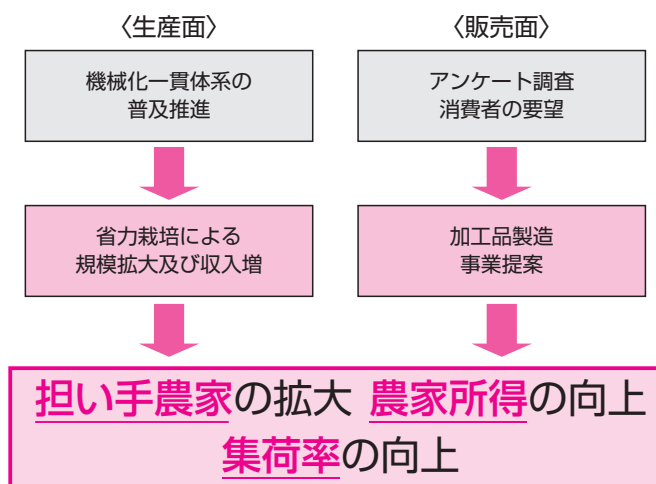
里芋の集荷率向上を目指すため、第1にTACが農家訪問して作付指導・防除指導を行う中で収穫の時にはJAに集荷していただけるように農家との信頼関係を構築していくこと、第2に愛媛農試が開発した新品種「伊予美人」への切り換えを進めることとしました、品種の切り換えは平成20年度に完了しています。第3に機械化一貫体系の栽培技術の確立による省力化・面積拡大につなげることで、第4としていかに有利に販売して農家の所得・手取りを確保していくかということです。

生産・販売の両面を通じて
産地育成に取り組む

それらを念頭に置いて、TAC、アグリアドバイザーは活動しています。

「伊予美人」について紹介しますと、従来の品種「女早生」からの系統選抜によって生まれ、品種名は「愛媛農試V2号」。「愛媛生まれのシロクマ類里芋美人」「里芋を食べて身体の中から美人」という意味で名づけたもので、平成18年にJA全農えひめが「伊予美人」という登録商標を取得してブランド化に取り組んでいます。

JAうまTAC生産・販売の産地育成



「伊予美人」への切り換えにあたっては、「女早生」に比べて10a当たりの収量は800kgの増加、秀品率は15%増加という目標を掲げて取り組みました。

そこでTACがかかわったのは、原種圃の設置と種子更新です。毎年セル苗で苗を立てて、原種圃で種子を増殖し、優良種子を選別して農家に供給しています。種子更新は、品種特性を維持し品質を安定させるため、TACと部会では5年ごとの種子更新を呼びかけているところです。

また、TACは生産・販売の両面を通じて産地育成に取り組んでいます。

生産面では機械化一貫体系の普及推進を図ることで、省力栽培による規模拡大と収入増加につなげていく取り組みです。高齢化により栽培農家は減少し面積は減少傾向ではありますが、規模拡大によって何とか維持している状況です。

販売面では、消費者等へのアンケート調査を通じて消費者がどのような商品・物を求めているのかを把握し、従来廃棄していた芋を有効利用による加工品製造と事業提案を進め、最終的には担い手農家の拡大と農家所得の向上、集荷率の向上を図っていくという取り組みを進めています。

具体的には、植付一貫体系による省力化・面積拡大の取り組みとして、TACが県の四国中央農業指導班と合同で毎年、里芋の生育過程について再度の研究、畝間・株間・畝の

高さなどの研究と試験栽培、収穫時の形状・収穫量調査を行っています。

また、全期マルチ栽培、生分解性マルチ栽培による圃場準備から植え付けの機械化を進めました。従来の栽培方法であれば1戸で1haが限界だったわけですが、機械化によって担い手の中には2〜3haの作付けも可能となり大規模な担い手も増えていったという状況です。高齢化で栽培者数は減少している中でも、面積維持につなげている大きなポイントです。

販売面では、TACの生・販マッチングの取り組みです。これまでのように商系業者と里芋の集荷を取り合う状況を打開するには、農家にすれば手取りの良いところに販売したいということですから、JAとして販売力を強化しようということで取り組みました。

販売力向上のために、消費者の購買意欲をどう引き立てるか、消費者の「伊予美人」の認知度・ニーズはどういった状況にあるかという課題を持って、JA全農えひめと連携し、広島や京都などに大鍋を持ち込んで、私どもの地域の郷土料理である「いもたき」の試食宣伝や食味等の嗜好調査アンケートを5年間続けてきています。

従来、京阪神などの消費地では「愛媛の小芋」というひとくくりにした販売でした。愛媛の「伊予美人」を売り込むために毎年アンケートを実施し、認知度・食味経験、購買意欲・需要時期・食味・需要価格・適正価格な

どを調査し、その結果を集計して担い手や販売担当者にフィードバックして栽培面や販売に役立てています。

5年続けてきた中で、「伊予美人」の認知度は、25%程度と年々上がってきていますので、「伊予美人」のブランドで売れるようにしていきたいと思っています。

廃棄していた里芋を活用して 6次産業化に取り組む

続いて販売強化、流通販売経路の拡大です。

市場・贈答用は、秀品・優品の10kg段ボールによる販売、市場・量販店用は優品の袋詰めや洗い芋、県内の加工業者については、市場出荷できない規格外の芋や親芋を販売し、ギョーザやコロッケを産直市等で販売しています。

里芋加工品の開発では、これまで市場出荷できず圃場で廃棄していた規格外の芋や親芋の有効利用につなげています。食品製造業者等との連携、新規加工品の開発、加工食品の販売促進によって里芋焼酎・冷凍コロッケ、里芋ギョーザや機内食でも人気となったかりんとう「ポリポリ」といった商品が生まれてきています。

こうしたTACの取り組み成果として、栽培面積が平成19年産では約186ha、23年に204ha、24年に207ha、25年に184ha、今年は170haとなっています。共販量は、

平成19年は1,493tでしたが、平成24年は2,156t、25年は1,568t、26年は1,920tの目標です。

専用肥料と里芋集荷の推進、 産直市対応など取り組みを強化

平成26年度のTAC活動では、肥料効果など現場の意見をくみ上げた里芋専用肥料及び省力化体系の整備、整備した専用肥料の推進、営農担当職員一丸となった里芋集荷推進に取り組んでいます。

それから里芋とは関係ありませんが、若い職員1人を産直市担当TACとして専任で新設しました。3か所のJA産直市でそれぞれ月に2回、計6回ほど、農家が野菜を出荷してくる入口付近で段ボールの上に座って農家の相談対応にあたっています。また、産直市担当TACが食育ソムリエ資格を取得して、料理面からもアドバイスができる体制を整えています。

それから、担い手後継者対策としての若手生産者との意見交換会も実施しています。

また、里芋について関東方面の販売先と新たに取引を開始しており、試食販売等も交えて販売強化に取り組んでいきます。

一方、26年度は、JAうま特産部会里芋専門部会が全国農業コンクール農林水産大臣賞を受賞するといううれしいニュースもありました。また、全国の10JAが参加して26年度

に福井県で第1回全国里芋産地交流会が開催され、27年11月にはJAうままで開催されることが決定しております。

TACの営農指導力強化を！

最後に27年度以降のTAC活動の取り組みについてお話しします。

TACのメンバーも当初から入れ替わっており若返りしてきています。どうしても営農指導ができれば農家には行きづらい状況の中で、経験の浅い職員を含め、研修等を通じて営農指導力強化を図らねばならないと考えています。

2番目は、TAC活動の充実に向けた要員配置ということで、新規作物としてTACが勧めたピットスポラムなどの品目もある中で、どうしても販売対応に時間がとられTAC活動が十分できないこともあり、要員配置をお願いしているところです。

3番目は、県内JAとのTAC活動の連携による地域課題の解決です。やはり量が力です。JA全農えひめ主催により作物別の相互圃場研修等も実施されていますが、県内JAと連携し県域として「伊予美人」のブランド化について取り組んでいけたらと思っています。

THE

ねとわーく

「愛媛いよかん大使が消費宣伝キャンペーンを実施」

果実課

J A全農えひめ果実課は、全国生産量の9割を占める愛媛いよかんの本格販売にあたり、愛媛いよかん大使による消費宣伝キャンペーンを実施しました。

り、1月23日には、J A全農えひめの岡本健治運営委員会会長と2014愛媛いよかん大使4人が愛媛県庁に中村時広県知事を表敬訪問しました。

愛媛いよかん大使4人は、「農家の方が熱意を込めて育てた、色よし・味よし・香りよしの三拍子揃った日本一の愛媛いよかんを多くの方に食べてもらえるようしっかりPRしてきます」など、一人一人が消費宣伝キャンペーンにあたっての決意を述べて中村知事に伊予柑を贈呈。中村知事から「色や見た目に加え、伊予柑は数ある柑橘の中で最もいい香りがする愛媛を代表する品種です。柑橘王国愛媛の誇りを持ってしっかりPRしてください」と激励されました。

キャンペーンは毎年行っており今年が39回目。大使らは、1月24日〜25日の「第37回えひめみかん祭り」(松山市のいよてつ高島屋で開催)で活動した後、1月29日から2月5日までの9日間、大阪を皮切りに、神戸・東京・札幌の全国4都市を回り、市役所・市場への表敬訪問、店舗でのPR販促活動、「さつぽろ雪まつり」会場で伊予柑のサンプリング活動等を行い、質・量とも日本一の愛媛いよかんをアピールしました。



▲中村知事にいよかんを贈呈



▲大田市場など各市場を訪問して拡販を呼びかけました



▲量販店等を回り店頭試食宣伝を実施



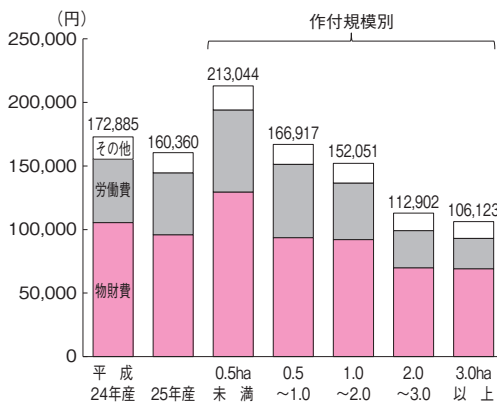
▲さつぽろ雪まつり会場でもPR



統計BOX

生産コスト削減で足腰の強い農業に — 平成25年産米生産費の結果から —

図1 10a当たり全算入生産費(中国四国)

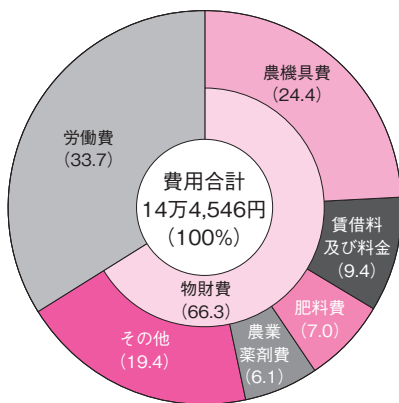


**10a当たり全算入生産費は
7・2%減少**

平成25年産米の10a当たり全算入生産費は16万3600円で、前年産に比べて7・2%減少し、60kg当たりでは1万9、179円で、前年産に比べ5・1%減少しました。これは、

生産費とは、農畜産物の生産のために要した費用の合計をいいます。また、費用合計から副産物価額を控除し、利子・地代を加えたものが「全算入生産費」です。
米の生産費統計は、米の生産コストを明らかにし、生産コスト低減対策の資料として利用されているほか、各種政策の基礎資料として様々な場面で利用されています。今月は、中国四国地域の米の生産費についてみていきます。

図2 10a当たり主要費目の構成割合(中国四国)

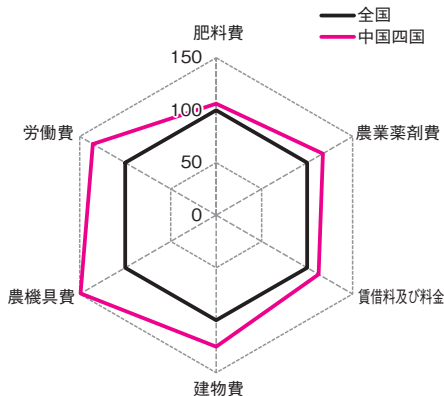


費用合計は14万4、546円で、うち物財費が9万5、861円、労働費が4万8、685円でした。主要費目の構成割合を見ると、農機具費の占める割合が24・4%(3万5、314円)で最も高く、次いで賃借料及び料金9・4%(1万3、608円)、肥料費7・0%(1万93円)、農業薬剤費6・1%(8、863円)の順となっており、この4費目で費用合計の約半分を占めています(図2)。

**農機具費が
約4分の1を占める**

建物、農機具等の償却費が減少したことに加え、耕起整地や管理労働の労働時間の減少に伴い、労働費が減少したためです。
また、作付規模別にみると、作付規模が大きいほど全算入生産費は少なく、規模拡大による費用対効果がみられます(図1)。

図3 10a当たり主要費目の金額比較(全国=100)



中国四国農政局
松山地域センター農政推進グループ

我が国の農業における担い手の農地利用は全農地の5割を占めていますが、農業従事者の高齢化、耕作放棄地の拡大などの課題が生じており、危機的な状況にあります。
このため、農林水産省では、「農地中間管理機構」を本格稼働し、基盤整備との連携等による担い手への農地集積・集約化を加速的に推進しています。農業の生産性を高め、競争力を強化していくためには、生産コストを削減することが重要です。

また、主要費目について全国平均を100とした指標でみると、中国四国地域はすべての費目で上回っており、特に、農機具費や建物費、労働費は全国平均を大きく上回っています。大半が中山間地域で作付規模が小さいことから、作業効率が悪くなることが要因と考えられます(図3)。



「おしゃれなフルーツカッティング」 ジュエルフルーツ

ジュエルフルーツって何？ と思われる方も多いのではないのでしょうか？ ジュエルフルーツは、今までの果物の切り方におしゃれなアイデアをプラスして、おいしさ、美しさを最大限に引き出し、宝石の輝きを放つ一皿に仕上げるフルーツと技法なのです。

私は、子どものころからフルーツが大好きで、大人になったらいろんなフルーツをたくさん買って食べたい!! と思っていました。就職して、日本中あちこち行ったところでフルーツを買い込み、食べていました。

2007年に野菜ソムリエの資格を取得しました。ソムリエとして活動する中で実施したトロピカルフルーツの勉強会。試食用に切ろうとしたところで、どう切るのがいいだろう…、一瞬ナイフを持つ手が止まってしまいました。迷いつつ切ってはみたものの、どうも納得がいきません。それまでは自己流で楽しんでいましたが、これを機

に、ちゃんと学びたいと思うようになったのです。

メカに弱く、DVDすら見たことのない私が、フルーツカッティングの載ったDVD付の本を買い、ホテルでカッティングの実演を見る機会があった時には図々しくも作品を貰って帰り、自分でまねて研究？ したりもしました。

そんな作品をブログにアップし、プレゼントをしたりするうちに、野菜ソムリエの仲間のお店でフルーツカッティング講座をすることとなりました。その様子がNHKテレビで放送され、さらにその反響でカルチャー講座などの依頼が来るようになったのです。このままではいけない! その頃、ブログを通じて知り合っていたフルーツカッティングのスペシャリスト・村上しずか先生がいっぱしゃいました。先生のもとで学ぼう! 一大決心をして、東京まで出かけたのが2011年

松岡 恭子

KYOKO MATSUOKA

1955年2月13日、旧北条市生まれ、松山市在住。松山北高等学校、松山東雲女子短期大学英文科卒業。全日本空輸旅客室乗務員室勤務。退職後結婚、家業・みなと食堂を営み、主婦業をこなす。2005年ジュニア野菜ソムリエ・2007年野菜ソムリエ（日本野菜ソムリエ協会認定）、2013年ジュエルフルーツクリエイター（村上しずかジュエルフルーツインスティテュション認定）取得。資格を活かして、果物や野菜の魅力を広く伝え、消費拡大を図る。フルーツカッティングの伝道師としても活躍中。

他、調味料ジュニアマイスター・ジュニア食育マイスター・カレーマイスター（日本野菜ソムリエ協会認定）。有限会社マツオカ 非常勤役員。調理師。NHK文化センター松山教室、SAISAI クッキングスタジオ（今治市さいさいきて屋内）講師。出張講座も随時受付中。

◆ベジタス松岡フルーツダイアリー
<http://ameblo.jp/vf-minato>



▲市販のチーズケーキに、イチゴとミカンと、ブルーベリーをふんだんに飾りつけて、豪華なジュエルフルーツの完成です！

秋のことです。それが、ジュエルフルーツとの出会いとなりました。

私はジュエルフルーツクリエイター取得後もさらなるスキルアップに通うほどに、ジュエルフルーツのとりこになったことはいまでもありません。その特徴は、道具はペティナイフ一本のみでOKですし、作成時間はわずか10分の短時間でできるため、お客様等にも完成までの過程を楽しんで観賞し

ていただけます。フルーツの形は整っていないなくてもカッティング技術で付加価値をつけて提供でき、少々傷みは省けるので規格外も大丈夫です。おまけに、皮や葉も飾りに必須のアイテムとなりますから、余すところなくフルーツを丸ごと有効活用できるので

す。

ホームパーティーやギフトに、ホテル、ウェディング会場で、新メニューのア



▲えひめみかん祭りで、ジュエルフルーツを実演する松岡さん

アイデア、サプライズにと、様々なシーンで、喜びと感動をもって、食べ方の提案へと広がっていきます。生産者の方々が丹精込めてつくられたフルーツを、視覚的効力を発揮し、付加価値の高い逸品として消費アップを図ることにつながっていくのではないのでしょうか。

ミカンは手でむき、リンゴはナイフで皮をむいて櫛形に切るものだと思います。ではいませんか？

ジュエルフルーツで、色、形、香り、味、季節感を存分に楽しむフルーツの魅力をもっともっとアピールできる活動をしていきたいと思っています。

J A全農えひめ発行の「果樹園芸」2014年11月号や、2015年1月のNHKテレビ「おはよう四国」、いよつ高島屋のえひめみかん祭りでの実演をご覧いただいていたなら幸いです。また、NHKカルチャーや、さいさいクッキングスタジオで、月1回講座も開催しています。

今回はジュエルフルーツと出会うきっかけとなった野菜ソムリエの資格取得奮闘記についてのお話をさせていただきます。

※「ジュエルフルーツ」と「ジュエルフルーツクリエイター」は登録商標です。

●第37回えひめみかん祭り

愛媛産柑橘の美味しさ・魅力をPRしました！

1月24日(土)・25日(日)の2日間、松山市のいよてつ高島屋8階スカイドーム特設会場で、愛媛産の柑橘を一堂に集め、『第37回えひめみかん祭り』を開きました。

このイベントは、愛媛県果樹同志会、愛媛県、J A全農えひめなどが、愛媛産柑橘のPR・消費拡大と果樹農業の振興を図るため、生産者と消費者の交流イベントとして毎年開催しています。

会場では、県内7 J Aから選抜された「果実コンクール」出品柑橘21品種190点を展示販売したほか、同志会メンバーらが売り場に立って、はれひめ・ボンカン・せとか、愛媛オリジナル品種の「甘平」「紅まどんな」などの試食や説明を交えて販売。「愛のオレンジロード」の紹介のほか、みかん餅つき、みかん綿菓子、ポン



ジュース蛇口、みかんのクイズや早むき大会、ジュエルフルーツの実演など多彩な催しを実施し、来場者は、愛媛の柑橘の美味しさと魅力を満喫していました。

●第37回「えひめみかん祭り」果実・ほ場コンクール

農林水産大臣賞に石田慎一さん、小林元翁さん

「第37回えひめみかん祭り」果実・ほ場コンクールで、農林水産大臣賞（優秀賞）には果実が石田慎一さん（J A えひめ中央）のせとか、ほ場は小林元翁さん（同）の愛媛果試第28号（施設）の園地が選ばれました。

その他のコンクール入賞者は次の皆さん（敬称略・カッコ内は品種名・J A名）。

◆果実コンクール

▽優等賞＝西山信（愛媛果試第28号・えひめ中央）、白濁泰（甘平・同）、宮川典丈（大津4号・えひめ南）、能田英文（不知火・えひめ中央）、宮内光樹（宮内イヨカン・同）、山岡稔（今津ボンカン・えひめ南）、滝本則男（はれひめ・おちいまばり）、木戸英雄（はるみ・えひめ中央）▽優良賞＝玉井真吾（宮内イヨカン・にしうわ）、山本一仁（イセ温州・えひめ中央）、坂本忠三（不知火・同）、政岡俊一（せとか・同）、吉井栄信（甘平・おちいまばり）、小池孝明（宮内イヨカン・えひめ中央）、二宮新治（今津ボンカン・えひめ南）、田中徹（南柑20号・えひめ中央）、青木聡（せとか・同）、青井秀典（宮内イヨカン・同）、山内明（同・同）、木村善全（甘平・えひめ南）、佐々木章人（不知火・にし



◀大臣賞を受賞した石田さんのせとか

うわ）、濱田武司（久能温州・えひめ中央）、清水一久（太田ボンカン・えひめ南）、山岡建夫（せとか・えひめ中央）、俊成吉洋（南柑20号・同）、桑木研造（宮内イヨカン・同）、玉井恵美子（同・にしうわ）、増田章（河内晩柑・えひめ南）、福田正昭（レモン・おちいまばり）、山口勇一郎（甘夏・にしうわ）

◆ほ場コンクール

▽優等賞＝矢野啓一（カラマンダリン・えひめ中央）、黒田伊智男（宮川早生・にしうわ）▽優良賞＝田中一義（今津ボンカン・えひめ南）、梶野一善（せとか・えひめ中央）

●JA資材店舗活性化研修会

JAの強みを活かしたサービス提供を！

JA全農えひめ肥料農薬課は、魅力あるJA資材店舗づくりにむけて、1月22日、松前町の農業技術センターで「JA資材店舗活性化研修会」を開きました。研修には、県内6JAの資材店舗担当者など19人が参加。全国情勢とホームセンター動向を踏まえた売り場づくりのポイントのほか、POPづくりやディスプレイ方法の技術を学びました。

研修では、全農の担当者が、「ホームセンター等競合相手の戦略等を踏まえ、基礎知識をしっかり身につけた上で、JAの強みを活かした品揃えやサービスを提供することが重要だ」と強調。肥料農薬の基礎知識や各JAの栽培指針を基にした肥料・農薬など農業資材のアピール手法を紹介したあと、参加者が手描きPOPとディスプレイ実習を集中して行いました。参加者からは、「実技研修もあり大変良かった。継続し



てほしい」、「短時間でディスプレイが完成することに感嘆した」などと好評でした。

肥料農薬課の池田益夫課長は「出向く営農と出迎える営農の両輪を確保することが重要。出迎える営農を担う皆さんが、研修を踏まえ、資材店舗活性化を進めてほしい」と激励しました。

●「ポンジューズ生誕45周年記念キャンペーン」抽選会

全国から届いた2万7,139通から当選者1,000人決定

（株）えひめ飲料は、1月22日、抽選で1,000人にPOMこだわりギフトをプレゼントする「ポンジューズ生誕45周年記念キャンペーン」抽選会を松山市の本社で行い、高原茂社長らが、2万7,139通の応募ハガキの中から当選者1,000人を選びました。

同キャンペーンは、昭和44年に発売した「ポンジューズ」の45周年を記念し、POMブランド利用者への謝恩とともに、ポンジューズとそのファミリー商品（アップル・グレープ・フルーツミックス）の定着・拡販をめざし、昨年9月上旬から12月末まで実施。応募数は前回を6,024通上回り、同社は「応募数とともに、ポンジューズ以外のファミリー商品のラベル応募も増えた。POMブランドの認知拡大につながっている」と分析しています。

応募者からは、「子どもも大好きで毎日飲んでます」「3世代で飲ませていただき、心もリフレッシュしています」「つわりの時に飲んだポンジューズはとても飲みやすく助かりました」などの声が寄せられていました。



▲高原茂社長(左から2人目)らが当選者選ぶ

●社会貢献活動

大阪と札幌の児童福祉施設に伊予柑を贈呈

JA全農えひめ果実課は、「愛媛いよかん消費宣伝キャンペーン」にあわせて、大阪市と札幌市の児童福祉施設に愛媛いよかんを計800kg贈りました。この取組みは、JA全農えひめが社会貢献活動の一環として、福祉施設の子どもたちに、愛媛の美味しい伊予柑を味わってもらおうと毎年実施しています。大阪市は、昭和63年から温州みかん、平成2年以降は伊予柑を贈っており、今回が26回目。札幌市への贈呈は39回目。

1月29日、大阪府役所正面玄関前で行われた寄付収受式では、同市こども青少年局の内本美奈子局長に、贈呈する伊予柑500kgの目録を手渡しました。

愛媛いよかん大使の白石千尋さんと武智真由さんは、同市の松本勝己子育て支援部長らにカゴ入り伊予柑を手渡し、全国生産量の9割を占める愛媛いよかんをPRしました。

2月3日には、札幌市役所で児童福祉施設に贈るイヨカン300kgの贈呈式を開き、JA全農えひめの諏訪玄県本部長が岸光右こども未来局長に目録を手渡しました。



▲大阪市では、内本局長（左）に目録を贈呈

●愛媛県JA土壌診断研修会

土壌診断結果を活用した営農指導を推進！

J A全農えひめ肥料農薬課は、平成27年が「国際土壌年」ということもあり、作物生産の基本である土づくりと土壌診断に基づく適正施肥を普及・推進するため、2月6日、松前町のJ A全農えひめ農業技術センターで「愛媛県J A土壌診断研修会」を開きました。

研修会には県内7 J Aの営農指導員25人が参加。県内の土壌実態と課題を踏まえ、土壌診断の重要性やポイント、診断結果を伝える処方箋の活用方法を学びました。

研修では、J A全農えひめの担当者が、「土壌とは生産物と同様に自然からの贈り物であり、次世代に受け継いでいかなければならない。そのためには土壌分析により土壌を把握する必要がある、その結果に基づく土壌改良・適正施肥が不可欠である」と強調。土壌分析結果を生産者に分かりやすく説明するために分析項目の基礎知識を学ぶとともに、県内の作物別の土壌診断結果の傾向と課題、処方箋による各J Aの指導事例などを紹介したほか、診断結果をもっ



と効果的に活用するために「農家と常日頃話し合い、各農家のクセや圃場状況を事前に調べておく必要がある」とアドバイスしました。

参加者からは、「土壌診断の重要性を再認識した」、「農家に自信を持って処方箋の説明ができるようになった」などと好評で、参加者アンケートでは約8割が「この講習会を受けて自分達でもJ A内部や部会員の土壌診断研修の実施が可能」と答えていました。

●Aコープいまばり愛彩店リニューアル

生産者コーナーはじめ精肉など地場農産物の販売を強化

1月31日、今治市のAコープいまばり愛彩店が、生産者コーナー「さいさいきて屋 彩菜」の売り場を1.7倍に拡大するなど地場農産物の販売拠点としてリニューアルオープンしました。今回のリニューアルでは、店舗の顔ともいえる「彩菜」の売り場面積を従来の33坪から55坪に拡大し、通路も買い物がしやすいように広くしたほか、これまで売り場を分断していた壁の撤去等により「彩菜」から生鮮売場、惣菜売場への顧客の流れ（回遊性）を改善しています。

また、精肉コーナーではJ Aおちいまばり管内の生産者が出荷した黒毛和牛を新たに伊予牛「絹の味」のサブブランド「今治おんまぐ牛」として販売し、「ふれ愛・媛ポーク」サブブランドの(有)仙高牧場産「仙高ポーク」とともに、地場農産物の販売を強化。水産物を含めた地場商品の拡大、国産原料にこだわった「全農ブランド商品」やエコープマーク品の積極展開を通じて、国産農畜産物の販売力強化と競合店舗との差別化を図っていきます。



◀売り場通路が広がった「彩菜」コーナー

同店は、J A全農えひめが平成14年8月に県内Aコープ店のモデル店舗としてオープン。現在は(株)Aコープ西日本が経営しており、1日平均約2,500人が利用。生産者コーナーには常時200人ほどが出荷しています。

セレモニーでは、(株)Aコープ西日本の草場浩社長、J A全農えひめ、J A・地元関係者によるテープカットを合図に、詰めかけた大勢の買い物客が一斉に入店しました。

全農プレゼンツ「石川佳純卓球教室」を松山市で開催！

卓球女子日本代表の石川佳純選手(全農所属)による全農プレゼンツ「石川佳純卓球教室」(主催：愛媛県卓球協会など)が、1月21日、松山市の松山市総合コミュニティセンター体育館で開かれました。

卓球教室は全農が特別協賛して平成23年から全国各地で開催し、今回が6回目。

石川選手は、教室の3日前まで開催されていた全日本卓球選手権大会で54大会ぶりとなるシングルス・ダブルス・混合ダブルスの3冠を達成したばかりでしたが、疲れを見せることなく、笑顔で県内各地から集まった56人の小中学生を指導しました。

多くの観客も見守る中、教室では、石川選手がマイクを片手にラケットや身体の動かし方などを説明しながら、模範演技や世界のフォアハンド攻撃、自らの体幹トレーニング法などを披露。参加者への個人指導のほか、8対8から3点先取のミニゲーム、子どもたちなどの質問に答えるトークショーも行っており、交流を深めました。

参加した子どもたちは憧れの石川選手を前に少し緊張した様子でしたが、「やっぱりすごかったです」「勉強になりました」「石川選手みたいに強くなりたい」と嬉しそうに話していました。

「愛媛には小学生の頃、母に連れられて試合に来ていました」という石川選手は、「少しでも参考にしてもらえれば…。今日は皆さんから私も元気・パワーをもらい、刺激になりました。皆さんに負けられないように、私も4月の世界選手権で頑張ります」などと話していました。

全農は、全日本卓球選手権大会など最高峰の選手・大会の応援のほか、少年・少女たちの夢の応援と子どもたちの健康な身体が育まれるようにという願いを込めて全農杯全日本球選手権大会(ホープス・カップ・パンビの部)の特別協賛や卓球教室開催を通じて次世代の育成にも取



り組むなど、世代を超えて日本卓球界全体の発展を支援しています。

なお、石川選手は、スタジオでの写真撮影など忙しいスケジュールの合間にJ A全農えひめ開発センターを訪問し、伊予柑の収穫体験や愛媛オリジナル品種の「紅まどんな」を試食。「楽しい」「美味しい」と笑顔を見せていました。

第28回ひめライス杯南海放送レディス卓球大会開催！

卓球女子ダブルスの大会では県内最大規模を誇る「第28回ひめライス杯南海放送レディス卓球大会」が2月1日、県総合運動公園体育館で開かれました。

21歳から95歳までの201組・402人がエントリー。最もレベルの高いAクラスは、西村真梨絵・武智瞳ペア(所属＝結、松山市)が優勝しました。西村さんは、「最近コンビを組んだばかりですが、勝因はチームワーク。楽しくゲームができて、意外とスムーズに優勝できました」、2年連続優勝の武智さんは、「昨年副賞のひめライスを食べて力をつけることができました。このお米を食べて来年の優勝をめざし頑張りたい」と2人とも笑顔を見せていました。

(株)ひめライスは、スポーツを通じて愛媛のお



▲副賞のお米を手に喜ぶAクラス優勝の武智(左)・西村ペア

米『ひめライス』をPRしようと、同大会に協賛。各クラス3位以内の副賞と参加賞に愛媛県産のお米を提供しました。



●諏訪県本部長インタビューの中でTACの強化を勧め産地基盤の維持拡大とありましたが、まだまだTACの活動が機能していないように思われるので、各JAのTAC研修を深め、組合員の所得向上につなげて欲しい。
高齢化が進む中で今後5年10年後の農業を守るため、「豊茂農業振興会」という組織を立ち上げて月1回の例会を開いています。中山間地域の生き残る道をテーマに取り上げてほしいと思います。

(大洲市・大本 昭裕さん)

●県本部長インタビューを読んで。JA全農えひめも農家所得向上に向けて様々な努力をしてくれています。ありがたいことですが、特に今後のお米の価格や消費拡大をお願いしたいと思います。

(西条市・長井 真美さん)

●新春企画のインタビューは、読みごたえのあるいい企画でした。現在進められているPPP交渉や農業農協改革は小さな地域農業を破壊するものです。力の弱い農家が共同で営農と生活を守る。という協同組合の理念にたつて、強力な運動の展開を期待しています。

(大洲市・富永 嘉明さん)

●ふるさとエッセーを読んで。「ヒアリング」とは「相手の身になって物事を考える」とにかく相手にしゃべらせる、その環境を作ることで、徹底して聞き上手になる。仕事でお客様に接客するのと同じだと思います。勉強になります。

(今治市・秦 ミヨ子さん)

●エッセーの「相手の身になって物事を考える」この言葉なくして世の中うまく進めない気がします。人と人とのつながりを感じました。

(今治市・唐津 沙耶さん)

●エッセーの森幸一郎さん。愛媛を舞台にした自主映画の監督さんがいるなんて初めて知りました。ぜひ第1作も見たいですね。

私74歳の夢は、教育の道に進んだり教育の道をめざしている3人の孫娘が一人前になったらら

んなで海外旅行に行くことです。そのため健康第一に現役で仕事に精出し頑張っています。家の庭に四季折々の花をいっぱい植えて花にうずもれ生活し、毎日仕事と家事をうまく両立して楽しく過ごしていきたい。

(西条市・高橋 千代美さん)

●かんきつ王国愛媛ではみかんは身近な果物ですが、北海道に旅行に行った時、ガイドさんからみかんはメロンよりも高級品！と聞いてビックリ。「はじめてのみかんむき」楽しくて食育の良い企画ですね。今ではいろいろな食感・味のかんきつが増えて驚いていますが、これからもどんなみかんが食べられるのか楽しみです。

(西予市・安岡 光代さん)

●農の風景で紹介された新品種「紅い雫」。愛媛のブランドいちごということで少し前にいただきました。とても甘くて美味しかったです。地産地消で安心安全で美味しい「紅い雫」。愛媛の新ブランドとして期待大ですね！

「はじめてのみかんむき」で「みかんをむく楽しさ」という言葉。当たり前のようにみかんをむいている自分、楽しそうにみかんをむいているわが子を見て、昔は自分も楽しそうにむいていたのかな？と思いました。そのあと、子どものむいた皮でなにやらアートを作っていました。

(今治市・後藤 亜紀さん)

●「紅い雫」の統一ロゴがとてもいい感じですが。特にカラーバージョンは、いちごがとても美味しそうで、食べたくなります。

先日、肥料袋をゴミに出すと、回収してもらえませんでした。行政に問い合わせると、農業用の肥料袋は廃棄物で回収はしないそうです。JAでもビニール等は回収していますが、回収頻度を多くしたり、ビニール等が出ないようにフレコン等の対応をしてほしいと思います。

(西条市・青野 剛大さん)

●毎号表紙を見ると、子どもの頃を思い出します。昭和の風景で大好きです。

(今治市・岡田 隆義さん)

今月のクイズ

伊予柑の代表品種「宮内伊予柑」が誕生して、何周年を迎えたでしょうか？

「○○周年」

プレゼント

クイズに正解した方の中から抽選で、図書カード1,000円分を10名様にさしあげます。

応募方法

折り込みハガキにクイズの答えと本誌に対するご意見・感想などをお書き添えの上、ご郵送ください。

締切り

平成27年4月18日(当日消印有効)

発表

「あぐりうど」5月号で発表します。

当選者発表

1月号の答えは「紅い雫(しずく)」でした。たくさんのお便りありがとうございました。厳正な抽選の結果、次の10人の方に図書カード1,000円分をお送りします。

中川 敏資さん(西予市)	三好 昇さん(四国中央市)
工藤賀代子さん(西条市)	城戸 和恵さん(大洲市)
寺町 トヨさん(今治市)	星川祐生子さん(四国中央市)
石井 章さん(伊方町)	田井能雅昭さん(東温市)
黒田三恵子さん(西予市)	竹田久美子さん(西条市)

編集後記

★TOPIC NEWSでは、1月に松山市で開催された石川純選手(全農所屬)の卓球教室の様子を紹介しました。直接の指導を受けた子どもたちももちろん「子どもたちの励みになります」と喜びました。世界に活躍する選手が育つ。当日は、(株)えひめ飲料のボスター用写真撮影もボスターのボスターに石川選手が登場します。

(正直)



今月の素材

イチゴ



なま

生で美味。ひと手間加えて
驚きの、フルーティな惣菜に！



▶(手前)イチゴのドレッシング(右前)イチゴのヨーグルト白和え(右後)フルーツ春巻き ※左は「イチゴのドレッシング」のお好み野菜

指導／学校法人愛媛学園（愛媛調理製菓専門学校）大佐古 正子先生

イチゴのドレッシング

〈材料・4人分〉 ※1人あたり約77kcal	
イチゴ	12粒
レモン果汁	1/2個分
塩	小さじ1/2
④ 黒コショウ	適量
サラダ油	小さじ2
砂糖	小さじ1/2
お好み野菜等 (レタス、セロリ、菜の花、ハッサク、生ハム等)	適宜
※粉チーズ	適量

〈作り方〉

- イチゴは粗めに刻む。
- ボウルに④を入れて混ぜ合わせ、①を加えてさっくり合わせ、イチゴの甘さにより砂糖や黒コショウの量を調節する。
- お好み野菜等を自由に器に盛り、②のドレッシングをかけて食す。

※好みにより粉チーズをふる。

イチゴのヨーグルト白和え

〈材料・4人分〉 ※1人あたり約127kcal	
イチゴ	8粒
アボガド	1個
セロリ	1本
松の実	少々
サラダ油	少々
絹豆腐	1/4丁
ヨーグルト	大さじ1
④ 塩	少々
薄口醤油	数滴
砂糖	小さじ1

〈作り方〉

- 豆腐は水から茹で、沸けば取り出して水気をよく切っておく。
- すり鉢で①をよく混ぜ、④で調味し「白和え衣」を作る。
- イチゴは4等分に切り、アボガドはサイコロ切り、セロリは食べやすい大きさに切る。
- フライパンに油を熱し、セロリと松の実を炒め、冷やしておく。
- イチゴ・アボガド・④を②の「衣」で和える。

フルーツ春巻き

〈材料・4人分〉 ※1人あたり約363kcal	
イチゴ	8粒
キウイフルーツ	1個
パイナップル(缶詰・輪切り)	4枚
むきエビ	12尾
塩	少々
コショウ	少々
春巻きの皮	8枚
小麦粉	少々
揚げ油	適量
マヨネーズ	大さじ3
④ ケチャップ	大さじ1
レモン果汁	少々
練りマスタード	適量

〈作り方〉

- イチゴ、キウイ、パイナップルはさいの目に切り、エビは半分に切る。
- ボウルに①を入れて、塩・コショウをして、さっくりと混ぜ合わせる。
- 春巻きの皮に②のをせて巻き、巻き終わりに糊(のり)状の水溶き小麦粉をつけて留める。
- 170℃に熱した油で揚げる。
- ④の材料をボウルでよく混ぜ合わせて「オーロラソース」をつくり、④の春巻きに添える。





ポン

スパークリング

Sparkling

長年柑橘の美味しさに「まじめに」向き合ってきた当社が検討に検討を重ねてできたポンスパークリング。「柑橘本来の風味」を活かし、濃厚でさわやかな果汁のおいしさが炭酸飲料でお楽しみいただけます。



株式会社 えひめ飲料

〒791-8603 松山市安城寺町478番地
TEL: 089-923-1500 FAX: 089-924-0304

<http://www.ehime-inryo.co.jp>
(通販専用) <http://www.pom-j.com>

きれいな肌は、
きれいな服より
恋を实らせると思う。

ビタミンCを摂取しよう！

愛を伝えるものって
バラの花以外にない
と思ってました。

オレンジも“愛のシンボル”

みかんの
季節到来とともに
受験と恋の季節が
やってくる。

ドキドキがとまらない！

家族とこたつと
みかん。
心地よいぬくもり。

みかんが人をつなぐ。

カラダに「愛」を。
ココロに「愛」を。

愛媛のみかん

愛のオレンジロード

オレンジは“愛のシンボル”。「オレンジデー」までの記念日に贈り合って、大切な人との絆を深めませんか。

11/3 12/3

♡ みかんの日

恋するシーズンの到来

〈旬の柑橘〉温州みかん、紅まどんな、POM 愛媛みかん旬ストレート100

1/14

♡ いい予感

恋愛成就のいいきざし

〈旬の柑橘〉伊予柑、ポンカン

2/14

♡ バレンタインデー

愛を届けよう

〈旬の柑橘〉伊予柑、ポンカン、はるみ、甘平

3/14

♡ ホワイトデー

愛に応えよう

〈旬の柑橘〉デコポン、せとか

4/14

♡ オレンジデー

愛を深めよう

〈旬の柑橘〉清見タンゴール、カラマンダリン

4.14 Orange day

ふたりでみかんを。

4月14日はオレンジデーです。

詳しい内容はホームページをチェック！

愛のオレンジロード [検索](#)

JA全農えひめ